

## 巻頭言

### 若い人に精神科医の素晴らしさを伝えたい

武田雅俊 日本精神神経学会理事長  
Masatoshi Takeda

ようやく精神医療・精神医学の重要性が認められるようになった。精神疾患は5疾患5事業の1つとなり地域医療政策での重要疾患の1つとなった。精神疾患の解明が、総合科学会議の提言に組み込まれ精神医学研究の必要性が指摘された。このような状況を受けて、学会では優秀な若い世代を精神医学・精神医療の担い手として養成することを重点課題と考えるようになった。筆者自身も学会の最大の役目は精神医学を専門とする若人を育成し良質の精神医療を提供できる体制を整えることにあると思っている。筆者自身が精神科医を素晴らしい職業と思っているからであり、そのような立場から精神医学の素晴らしさについて述べてみたい。

#### 精神科は全人的医療を担当する

精神科は、現代の細分化された専門科目の中でほとんど唯一の全人的医療を担当する専門科目であり、精神科医には生物・心理・社会を統合した幅広い視野からの臨床が期待されている。「全人的医療」は、近年繰り返して行われるようになり、全ての医師・臨床家に求められていることではあるが、精神科医は他科医師以上にこの医師としての職業の本質的な部分を臨床の場で経験する。精神科医ほど日常的に医療を介して他人を助けることを経験できる臨床科目は他にはない。多くの精神科医は一生の仕事としてその職業を継続する。精神科医においては、人を助けることのできる知識と技量は、年齢とともに蓄積されていくものだからである。

#### 精神医療のニーズが増大している

精神疾患は年々増加しており、平成20(2008)年の患者数は323万人となった。このような状況を踏まえて、2012年7月に策定された「5疾患5事業」の地域医療計画において、精神疾患は行政がその対策を講ずべき重要な疾患と位置づけられた。精神科患者数は、これからも社会の複雑化・高齢化とともに増加していきだろうし、複雑な社会の中で精神科医の活動は医療にとどまらず、司法・教育・産業衛生などの多くの領域で期待されている。

#### 心のサイエンスが花開こうとしている

これまで、神経科学領域の基礎研究者は、精神疾患より

も神経疾患をターゲットとしてきた。以前は精神疾患に手が届かなかつたからだが、今や精神疾患は研究の主要なターゲットとなりつつある。細胞生物学・分子遺伝学・脳機能イメージングの膨大なデータをバイオインフォマティクス手法により解析・統合しようとするブレインサイエンスは、ヒト脳機能の解析を可能としつつある。2013年から欧米においてはBrain Initiative, Human Brain Projectが立ち上げられ、脳回路の網羅的コネクトーム解析プロジェクトに巨額の予算が付けられるようになった。これらのプロジェクトは最終的には精神疾患の克服を目指しており、精神疾患の解明がサイエンスの射程に入るようになった。わが国においても科学技術総合会議の提案の中に「精神疾患の解明」が盛り込まれ、精神疾患研究の重要性が認知されつつある。日本精神神経学会でも「精神疾患克服に向けた研究推進の提言」を公表しその重要性をアピールしているが、優秀なリサーチマインドをもった精神科医を育成したいと思っている。精神疾患の研究には精神科医としての臨床経験が大きな意味をもつと考えられるからである。

わが国の精神科専門医の受験者数はいまだ十分ではないことから、学会では、優秀な次の世代を精神科にリクルートすることを目的に本年8月16~17日に東京京王プラザホテルにおいて第1回精神科サマースクールを開催した。今回は第1回ということで準備に手間取り周知期間も十分ではなかったが、全国から医学部学生、初期研修医、転科を考えている人40名が参加した。第1日は、学会理事長、七者墾構成団体からの挨拶と厚生省精神保健課による精神医療の現状についての紹介であった。午後はグループに分かれて都内の精神科施設を各人の希望に従って見学した。そして夕方には会場に戻りグループ討論と懇親会を行った。第2日目は、加藤忠史先生による「岐路に立つ精神医学」と成田善弘先生による「日常診療における精神療法」の講演を拝聴した。いずれも、若人の知的好奇心、精神科診療の奥深さを示唆する濃い内容の講演であった。サマースクールの最後には研修修了証が交付されたが、この修了書の提示により来年の学術集会への参加費・懇親会費の大幅割引が宮岡大会長から発表され、この修了証書は一挙に価値あるものとなった。参加者の意見を取り入れて、来年度は東京と大阪の2か所で開催したい。